

前回は、「神の国」は「ここにある」「あそこにある」というものではなく、「あなたがたの間にある」つまり「人と人との交わりの中にある」ということを書きました。私たちが互いに愛情と信頼で結ばれるなら、その美しい関係はまさに神の国にいる状態だということです。

さて今回から、私たちが持つ論理的・概念的に物事を考える能力（いわゆる「理性」）を超えた出来事だからでしょうが、「これだからキリスト教は信じられない」と多くの人たちが『聖書』を閉じて本棚の片隅に置くか、古書店に売るか考え出すかもしれない〈奇跡〉物語についてみていきましょう。

### ♣ 〈奇跡〉物語（1） 『5つのパンと2匹の魚』について（その1）

「こんなこと出来っこないよな」「クリスチャンの人たちは、こんなことホントに信じているの？」という声が聞こえてきそうな話を始めたいと思います。

『新約聖書』の中では、イエスが〈奇跡〉を起こす話がいくつか出てきます。奇跡物語は、大きく二つのグループに分けることができます。一つは、イエスが湖の上を歩いたという物語や、婚姻の席で水をぶどう酒に変えた話などがあります。これらは「自然」が対象となるもので〈自然奇跡物語〉と呼ばれています。

もう一つは、難病に苦しむ人たちを治す物語や悪霊追放の話など、「人間」を対象とする奇跡なので〈治癒奇跡物語〉と言われます。まず〈自然奇跡〉からみていきましょう。

.....  
『1その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3イエスは山に登り弟子たちと一緒にそこにお座りになった。4ユダヤ人の祭りである過越祭（すぎこしさい<sup>㊦</sup>）1)が近づいていた。5イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、6こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。7フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン（<sup>㊦</sup>）2)分のパンでは足りないでしょう」と答えた。8弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。9「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」10イエスは「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ5千人であった。11さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンを集めなさい」と言われた。13集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。14そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。15イエスは、人々が来て、自

分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。』（『ヨハネ』 6-1~15）

① 過越祭：ユダヤ3大祭の一つ。エジプトの奴隷であったイスラエル人が神の奇跡により解放された歴史を記憶する祭り。「過越」という言葉は、エジプト全国の長子が主の使いに滅ぼされた夜、門に子羊の血のついているイスラエルの家の上をその災いが「過越し」、無事だったという故事に由来する（旧約聖書『出エジプト記』12-13,21~27）。3~4月の時期に開催された。文中、『過越祭が近づいていた』（4節）、あるいは『草がたくさん生えていた』（10節）とあるので、早春の時期であったことがわかります。

② デナリオン：「1デナリオン」は、当時の労働者1日分の賃金。これを仮に「1万円」とすれば、「200デナリオン」は「200万円」になります。

この話は、『マルコ』6章34~44節、『ルカ』9章10~17節、『マタイ』14章13~21節にも同じ内容の話があります。（『マルコ』8章1~9節、『マタイ』15章32~38節には、さらにもう一つのよく似た話が載っています。）

### パンは増えたのか？

この話はふつう、『パン増やしの奇跡』と呼ばれています。たった「5つ」のパンが「5千人」の男たちを満腹にさせ、残ったパン屑を集めてみたら「12」の籠がいっぱいになった — というのですから、「おいおい、冗談はやめてよ！」と思うのがふつうですよ。

山浦玄嗣先生の『ガリラヤのイエシュ』には、この「5千人」の文字に〈注〉があり、『ユダヤ人は人数を数えるのに、成人男子の数だけ数えるのが通例。女子供は人数に入らない。』とあります。ということは、5千人の男たちの何割かは妻を同行させ、子供がいれば引き連れて、あちこちの町や村からイエスの話を聞きに集まっていた — ということも考えられます。いったい、どれくらいの人数だったのでしょうか？ 想像してみてください。

また、「大麦のパン」とは、いったいどんなパンだったのでしょうか。山浦先生によれば、大麦のパンは『貧乏人の食べ物』であり、『円形のパンで、直径15センチ、厚さ1.5センチぐらいのもの』だったようです。今で言えば、ピザのSSサイズぐらいでしょうか。

「魚」はどんな魚でしょうか？ もちろん「生（なま）」ではありません。生の魚を持ち歩くわけはありません。『保存用の干物』だろう — と先生は書いています（『走れ、イエス』）。

ここで、11節の『イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、…』以後を、もう一度読み直してみてください。どこをさがしても「パンと魚が増えた」ことは書かれていませんね。私たちが「パンが増えたのだらう」と考えたのは、「5つのパンと2匹の魚が増えたから、5千人もの人が満腹した」と推測したからです。マルコ、ルカ、そしてマタイの福音書にも、マジシャンのように『イエスが次々にパンを増やした』なんて、ひと言も書かれていません。どうして福音書を書いた4人は、このことを書かなかったのでしょうか。もしわたしなら、イエスの離れ業を事細かに書き記し、その偉大な力を知ってもらおうとするはずですが、しかし、彼らは書かなかった。なぜでしょう。

### 福音書記者が書きたかったこと

上智大学夏期神学講習会で、4~5回お話を聞く機会を与えられた雨宮慧（あめみや さとし

上智大学神学部教授。昨年退官) 先生の考え方を引用してみます。先生は毎回、私たち受講生が理解しやすいように考慮された資料を用意され、淡々とお話になります。「こういう人が神学者というんだらうな」と、いつも思います。

兩宮先生は、福音書記者が「イエスがパンを増やした」ことを書かなかったのは、『この物語の主眼がパンの増加におかれてはいないから』と書いておられます。パンが増えたことに『語るべき意味を認めなかった』のです。それよりも『もっと大切なことをこの物語で書きたかった』のだ、と。

先生は「パン増やし」の話を、『マルコ』6章34節から引用されています。内容は前掲した『ヨハネ』とほとんど同じです。先生が重要視する2カ所を書きます。

『34 舟を降りるとき、イエスは大勢の群集をごらんになり、牧者のいない羊のようなそのありさまを、哀れに思い、いろいろと教え始められた。』

『39 イエスは皆を組に分けて青草の上に座らせるように。弟子たちにお命じになった。』

先生は、この2カ所は互いに関連する表現であるとし、『5つのパンと2匹の魚を食べて満腹した5千人の男が羊にたとえられ、その羊が「青草の上に」伏して、牧者に養われる』というイメージが使われているのではないかといいます。そして、旧約聖書にこのイメージ通りの詩編があることを指摘されます。それは『詩編23』です。

.....  
『主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。 / 主はわたしを青草の原に休ませ / 憩いの水のほとりに伴い / 魂を生き返らせて下さる。 / 主は御名にふさわしく / わたしを正しい道に導かれる。 / 死の陰の谷を行くときも / わたしは災いを恐れない。 / あなたがわたしと共にいてくださる。 / あなたの鞭 / あなたの杖 / それがわたしを力づける。 / わたしを苦しめる者を前にしても / あなたはわたしに食卓を整えてくださる。 / わたしの頭に香油を注ぎ / わたしの杯を溢れさせてくださる。 / 命ある限り / 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。 / 主の家にわたしは帰り / 生涯、そこにとどまるであろう。  
.....

### マルコが伝えたかったこと

この『詩編23』の羊の群れを養う神のイメージが『マルコ』6章で使われ、『イエスこそは「飼う者がいない羊」をあわれみ、牧者となって、「青草の上に」伏させ、食べさせ養う方なのだ』ということを語っているのです。マルコがイエスこそ『詩編23に歌われた〈養う神〉だ、とイエスに対する信仰告白を行っていることになります』。これこそ、マルコが人々に伝えたかったことだったのです。神の働き・呼びかけが、イエスを通して私たちの中で始まっているんだよ — つまり、ここに〈神の国〉が実現しているんだよ、というメッセージがあるのです。

「あれっ、今回は山浦先生のケセン語訳はないの？」とお思いの方、次回はこの『パン増やし』の話を先生がどう受け取っていらっしゃるのかをご紹介します。きっと「ああ、そうなんだ！」と、思わず膝を打つはずです。おたのしみに！

【引用・参考にした書籍】 ・兩宮 慧『なぜ聖書は奇跡物語を語るのか』(教友社、2011)

- ・山浦玄嗣『走れ、イエス』(キリスト新聞社、2004)
- ・日本聖書協会『聖書 新共同訳』
- ・大貫 隆 他『岩波キリスト教辞典』